

# 私の現代中国研究

毛里和子

## お礼と序言

(二〇一一年一月、文化功労者の顕彰を受けました。市古宙三先生のもとで東洋史を学んだ先輩、同輩、後輩の皆様が二〇一二年一月一九日に「祝う会」を開いて下さいました(於渋谷東武ホテル)。今回、読史会から、「私と現代中国研究」の執筆を依頼されましたが、本稿では、まず「祝う会」でのお礼の言葉を文章にしてまえがきのご挨拶といたします。そのあと、四〇年間の現代中国研究を通じての私のささやかな「三つの挑戦」を記録し、編集部からのご依頼にお答えしたいと思えます。

以下、まず、一月一九日「祝う会」での毛里和子のお礼のご挨拶です。

\* \* \* \* \*

本日、私ごとき浅学非才なもののために、ご多忙のなか、多くの方がお集まり下さり、賑々しく祝う会を開いて下さり、まことにありがとうございます。東洋史のグループ、史学科一〇回生のグループ、そして生協運動で一緒した仲間たち、さまざまにお世話になり、またさまざまに青春を謳歌しましたが、今回の文化功労者顕彰は、お茶の水女子大学でのこうした方々との出会いとお付き合いなしにはおそらくなかったことでしょう。

まずは、三人の方にお礼を申し述べなければなりません。第一は勿論市古宙三先生です。本日は先生のかわりにお花が出席して下さいますが、大学入学からずっと、先生の無限大の寛容さに何回も救っていただきました。異端の現代中国研究も、ご批判はあったでしょうに、なんとか許して下さいました。次が、日本国際問題研究所でお世話になった山極晃先生です。助手として在職しながら東京都立大学大学院で勉強することを許して下さいました。中国以外にも国際政治について多くのことを教えていただきました。第三が、結婚生活四五年を越える夫・毛里興三郎です。いろいろなわがまま、海外や静岡への単身赴任にも異議を申し立てることなく、支えてくれました。実は、私は、この三人の男性に足を向けては寝られないのです。

今回の受賞について、二つの意味で大変恥ずかしく、身がすくむ思いがいたします。

一つは、私自身、日本における中国研究の戦前からの膨大な遺産をほとんど無視して突き進んできたために、自分の研究には大きなエアポケット、欠落があり、そのため顕彰される資格がないのではないか、と思っているからです。平野健一郎氏（早稲田大学名誉教授）などのご尽力でできた『インタビュー戦後日本の中国研究』（岩波書店、二〇一一年）のなかで、「四〇年間の中国研究」について私も雑感を述べましたが、一九六〇年代半ばから中国研究の門をくぐった私の場合、中国への侵略についての「強い反省」や、冷戦期のグローバルなイデオロギー対立の影響を強く受けました。その結果の一つが、戦前の中国研究への全否定でした。加齢が進めば進むほどに、「ああ、もったいないことをした」と痛恨の極みであります。二〇一〇年春、早稲田大学を定年退職した際、中国研究を卒業したいと考えて中国関係の中国語・英語・日本語の書籍・雑誌のほとんどを早稲田大学および中国の復旦大学に寄贈いたしました。わが書庫は大変すっきりしたのですが、さて、思いなおして研究しようにも本がありません。そこで、今回受賞のお知らせをいただいて、すぐに宮崎市定全集を購入しなおしました（二〇一二年の課題図書といたします）。

もう一つは、二〇年前に自分に課した課題である、現代中国研究三部作が完成していないからです。中国研究を地域研究の一つとして考えた場合、「中国をまるごと理解・認識する」ことが不可欠だと考えてきました。そこで、①まず政治学で中国政治の分析に正面から挑戦すること、②世界のなかでの中国を「中国外交概論」という形で読み解くこと、③中国は諸民族の複合体であり、近代国民国家としては未完で、かなり脆弱な国境をもっており、その辺境から中心を見る視線で国家と民族を分析する、ということでした。それから二〇年、①と③はなんとかできました。①は大幅に改訂した第三版を日本語と中国語で近く出版する予定です（二〇一二年六月に刊行しました）。ところが、②の外交が半分まで行ったところでどうしても進みません。いろいろな障害につぶされそうです。なんとか三部作を早く出してしまわなければなりません。この三部作ができたときによくやく、私の中国研究は「体をなす」ことになる、と密かに考えています。

このように、正直なところ、「功労者」の称号には恥と戸惑いと不安の方が多いのですが、他方で、私のような、女性で、東大にも京大にも縁がなく、ハーバード大学の門をくぐったこともない、しかも、現代中国研究のような「やくざな学問」をしてきた傍流中の傍流である人間の活動が、一部の方の目にとまり、このような形で榮譽を受けることは、率直に言っても嬉しいことです。ちなみに、文化功労者制度は一九五一年にスタートしていますが、以来六〇年間、功労者として顕彰されたのは、気がつく限り、中国政治や東洋史、社会科学部門では津田左右吉氏、吉川幸次郎氏、大塚久雄氏、宇沢弘文氏、山本達郎氏、宮崎市定氏、石川忠雄氏、斯波義信氏、小宮隆太郎氏、富永健一氏などの各氏、女性の社会学者は中根千枝氏、緒方貞子氏のたったお二方です。社会・人文科学分野の外国人研究者も、マリウス・ジャンセン氏、ドナルド・キーン氏とたったお二方です。

中国研究への私の挑戦に入る前に、まず、中国研究に携わってきたの雑感を二つ申し述べたいと思います。

ふり返ってみて結局四〇年以上、中国を相手に闘ってきたことになりました。女性が研究者として第一線で活動することは、日本ではそれほど簡単なことではありません。私の場合は、努力というより、上司、先輩、仲間、家庭に大変恵まれ

たためにここまで続けて来ることができました。また大変鈍感なので、回りを気にせずわがままを通してきました。ただ一般に、四〇歳台後半から、いろいろな意味で忙しくなり、また学問外の「誘惑」も多くなります。そのなかで、密かに、「三つの不」原則を作りました。今日まで有効な原則です。

一つは、ジェンダーは語らない、です。私は中国を研究し、中ソ関係を分析し、東アジアの国際関係について論じます。そのときに女か男かを意識したことは一度もありません。研究者には本来ジェンダーはないのではないのでしょうか？（これには、異論がある方も多いかも知れませんが）。

第二は、いかなる政党とも関係をもたない、という原則です。国際政治や現代政治をテーマにしていますと、政党や官僚機構や企業との関係も増えてきます。とくに政党にとらわれると厄介です。敬して遠ざけておくのが賢明です。

第三が、大変わがままな原則なので響きを買いますが、大学の行政職やその他お役所、社会的活動において、もし「長」を依頼されても、気力を振り絞ってお断りすることです。五〇歳台になると、人生で、何ができるか、ではなく、何ができないか、という風に変わってきます。体力も時間も少なくなりますので、切り捨てていかなければなりません。若いうちは、未来はバラ色、選択肢は無限、なんでもできる、と思うのですが、それができなくなります。ともかく、人生のシェイプアップがとても大切だと痛感したことでした。（この点についても、異論が多いかも知れませんが）。

\* \* \* \* \*

次に四〇年間の中国研究を振り返りつつ、私のささやかな学問的挑戦について述べることにいたします。

### 現代中国研究とパラダイムの転換

現代中国研究、それも政治学、法学、社会学、経済学など社会科学による現代中国研究についていま第一に思うこと

は、現代中国研究の方法論、あるいはパラダイムの問題です。いま、後述するように、現代中国研究「三つの挑戦」を掲げています。あまりに中国が分からないからです。

みなさんも毎日ご覧になっているように、二一世紀に入って中国は、まことに巨大で圧倒的です。六〇年代はじめ、私が中国研究を始めたときに、今日の姿を想像することなど一〇〇%できませんでした。巨大であるばかりでなく、いまの中国ではあらゆる事象が観察できます。どっちに向かっているのか分かりません。中国ではいままも、問題があると、村から北京中央へ、トップリーダーに陳情するという「信訪」とそれに対する当局の暴力的制圧が話題になっていますが、このような江戸時代吉宗の時の「目安箱」や「直訴」、「越訴」に等しい制度が堂々とまかり通っている反面、電子産業は世界の先端を走り、大都市では一家に三台の自家用車をもつ普通の庶民が沢山いる、というウルトラ現代の一面もあります。どういう方法で分析するのか、基準をどこにおくのか、「中国は手に余るものになった」というのが研究者としての私の率直な気持ちです。

また現代中国は研究対象としても厄介です。社会主義、発展途上国、伝統という「三つの内実」をもち、しかもその三つが複雑に絡みながら共棲しているからです。また、改革開放方針を出した一九七八年からの三〇年、中国は、明治維新以来一五〇年の日本の歴史に等しい激動を一挙に経験しており（圧縮型発展とでも申しましょうか）、その変化に追いついていくのはとてもむずかしいのです。三〇年間でGDPは一五倍に、一人当たり国民所得は一二倍になりました。一人当たりGNPは五〇〇〇ドルを超え、「中所得国の陥穽」が心配されるほどです。とくに、「経済の市場化を加速せよ」という鄧小平の遺言（一九九二年の南巡談話）以来、中国の変動はあまりに激しく、それ自身が「乱反射」して観察者はたやすく眩惑されてしまいます。

九〇年代半ばから私は、中国の激動に少しでも追いつきたいと考え、中国分析のための新手法の開発にささやかながら挑戦してきました。そしてその挑戦はまだ終わっていないのです。以下に、中国認識のためのパラダイム転換の必要性に

ついで述べ、次いで、私のパラダイム転換の試みを「三つの挑戦」として整理しておきたいと思います。

率直なところ、いま現代中国研究に厚い「壁」が立ちふさがっているように思えます。さまざまな中国があつて、さまざまな方向に蠢いており、トータルな中国を論ずることなどとても無理なのです。しかも、中国の現実の動きは歴史的経路や経験則、経験科学で積み上げられてきた「暗黙の前提」をたえず裏切ります。「パラダイムの危機」が言われるゆえんなのです【本論考の原型は、毛里和子『現代中国政治第三版 グローバル・パワーの肖像』（二〇一二年、名古屋大学出版会）の序章です】。

### 現代中国についての四つのモデル

明清史を研究する黄宗智 (Philip Huang、カリフォルニア大学バークレー校) は一九九〇年代半ばに「中国研究のパラダイム危機」を論じています。彼は、明清期中国についての「停滞した封建制論」も「資本主義萌芽論」も理論的に行き詰まり、パラダイムの転換が必要だと強調します。「相互に異なりかつ反対の意味を示す諸分析概念の間に共有された、語られることのない、暗黙の前提」を疑う必要があるということです。中国史および中国は、◆階層化された自然経済と統合された市場、◆市民勢力の発展をとまなわなない公共領域の拡大と国家によるその独占、◆リベリズムを伴わない実定法主義、◆市民社会をとまなわなない市場化などの「パラドクス」に満ちあふれており、それが観察者・分析者にパラダイム転換を求めている、という彼の指摘は、現代中国にもまさにぴったり当てはまるのです【フィリップ・ホアン一九九四】。

私は九〇年代から二〇〇〇年代にかけて、現代中国および現代アジアについて大きな共同研究を進めてきました（科研費特定領域研究―現代中国の構造変動、早稲田大学COEプログラム―現代アジア学の創生、人間文化機構―現代中国地

域研究)。そこで学んだことをもとに、昨今では次のような中国研究のための「四つのモデル」論を提起しています。それぞれが、仮説設定に導く「理論モデル」でもあり、中国自身の今後の「発展モデル」でもあります。

① 普通の近代化モデル

たとえいろいろ「中国的」だとはしても、方向は民主化と市場化である、とするもの。

② 東アジア・モデル

独裁体制下の経済発展とその後の民主化という、東アジアが経験した方式が中国に当てはまる、と考える

③ 伝統への回帰モデル

「民主化が中国の問題を解決できる訳ではない」と、伝統、しかも儒学的価値への復帰を将来モデルとして描く。

④ 中国は中国モデル

現代中国の諸現象、構造、近い将来は、近代西欧も、伝統中国も、東アジアの経験も引証基準とするわけにはいかない固有性をもつ、と考える。

このうち、どのモデルが理論モデルとして有効か、あるいは中国の発展モデルとして現実的か、それは分かりません。不合理だらけなのになくならない都市・農村二元戸籍制度や陳情制度（信訪・上访）など、「変わらない中国」に注目すると、④の「中国は中国モデル」がとても魅力的に見えてきます。また、民主化と市場化が予定される道だと設定する「普通の近代化モデル」は単純明快で、共感を得られやすいモデルです。しかし、ことはそれほど簡単ではないようです。後で述べるように、比較と「アジア化」に挑戦している私としては、とりあえず②の「東アジア・モデル」で中国の今、および今後を見つめていきたいと考えています。

表 1 中国の構造変動概念図

旧二元構造	新三元構造
国家 / 社会	国家 / 半国家・半社会 / 社会
中央 / 地方	中央 / 地方 / 末端
計画 / 市場	計画 / 半計画・半市場 / 市場
都市 / 農村	都市 / 半都市・半農村 / 農村
労働者 / 農民	労働者 / 農民工 / 農民

### 挑戦その一…三元構造論

私の第一の挑戦は、現代中国を二項対立でとらえることはできず、三元的にとらえることが必要になっているとするもので、いわば三元構造論です。既成の諸モデルから離れたところに現代中国がある、と考える点では、「中国は中国モデル」の一種だと言えましょう。改革開放は、中国の政治・経済社会が毛沢東時代の二元構造から三元構造に変わるプロセスでもあります。その変容は【表1】のように簡略化できます。

もう少し具体的に言えば、たとえば、八〇年代半ばに始まる村民自治運動は、中国の中央権力が末端までの支配を断念し、いわば末端を放任したことを意味し、中央・地方・末端の三元構造への移行が始まったと解釈することが可能です。また、小城镇に小さい企業を開き、そこに農民を吸収する離土不離郷方式（農民は農業を離れても農村は離れない）で生まれたのは、都市でも農村でもない中間物であり、農民でも労働者でもない人々でした（民工、あるいは農民工と呼ばれます）。また、八〇年代以来、多くの農村労働力が近郊都市へ、あるいは遠くの大都市へと流動しました。彼らは、しかし、土地、農業を離れても、いまなお、都市住民にはなれません。農民工はそれ自身が身分なのです。

他方、とくに一九九五年の「抓大放小」（国有企業改革で、大規模企業は国がしっかり掴み、小規模・零細企業は民間に放つ政策）以来、実際には「国進民退」が進み、市場化で大きくなっているのは、民営企業というより、営利化した国有の独占企業であり、国家と社会の間に双方が浸透する国家・社会共棲の領域が勢いづいているようです（呉軍華「日本総合研究所はそれを「官製資本主義」と言いま

す)。ようするに、さまざまな領域で、三元的状況が生まれてきているのが観察できるのです【表1参照】。

改革開放三〇年余り。中国はいまどこにいたのでしょうか。私は、かなりの領域で二元構造から三元構造への変化が観察できる、と見ています。そして、中央／地方／末端、国家／半国家／社会、都市／半都市／農村という三元構造はかなり長く続きそうです。というのは、三元構造の根源には土地をめぐる現行制度（公有制）がありますが、中共が権力の源泉であり土台である土地を手放すとは考えられず、そうなるると三元構造が変わるには長い時間がかかるでしょう。この段階が長く続くとすれば、移行期というよりも、一つの構造です。当代中国について、三元構造という観点での本格的分析が必要な所以です。

## 挑戦その二 比較の中の中国

一九五〇年代から今日に到る中国は、ソ連・ロシアとの比較、東アジアの発展途上国との比較を通じてよりクリアに分析できると考えています。最初に提起した四つのモデルでは、第二の東アジアモデルに当てはまります。

実験ができない社会科学では、「比較」が自然科学での「実験」に相当します。比較には三つの効用があります。一つは主要対象をより鮮明に浮かび上がらせます。中国とロシアの比較を通じて、アレック・ノーブ『スターリンからブレジネフへ——ソヴェト現代史』が言うように、「どこまでがロシアという事実に由来するものなのか、どこまでが共産主義支配のせいなのだろうか。ロシアにおける共産党の支配はどの程度ロシア的であるのか」を解き明かすことができます。同じことが当然、中国についても言えるでしょう。

第二は、比較を通じて普遍性や概念化に近づくことができます。それによって、社会科学の理論や手法それ自体のレベルアップに貢献できます。

第三の効用は、先行事例との比較を通じて対象事例の将来を考えることができます。経済発展から政治民主化にソフト・ランディングした韓国・台湾などの事例から、どのような条件が整えば中国で民主化に進めるのかを想定、もしくは測定することができます。

だが、これまで現代中国研究で本格的な比較研究はそれほど多くありません。中国が巨大、悠久すぎて、比較を拒むと思ってしまうからでしょう。その中で経済の分野では、ロシアやインドと比較した加藤弘之（加藤二〇〇九）や中兼和津次（中兼二〇一〇）などの成果が出てきています。

私は前に、中国と旧ソ連の社会主義、脱社会主義の「移行」のプロセスを、党Ⅱ国家体制、官僚制、農村共同体と農業集団化という三つの点から比較しました。その結果、ソ連で社会主義が崩壊したのに、中国では体制が維持され、漸進的市場化が進んでいる理由を次のように摘出しました。

①ソ連では七〇年代から党と国家が分離していたのに、中国では党が支配する党・国家・軍の三位一体体制は安泰である、②ソ連では強固な経済官僚制、軍産複合体が体制内改革を阻んだが、中国では強固な経済官僚制ができなかった、③ソ連では暴力的農業集団化で農民と伝統的農村社会が破壊されたが、中国では農民と伝統農村は壊されることなく、八〇年代以降の農村改革の原動力になった、などです〔毛里一九九四〕。

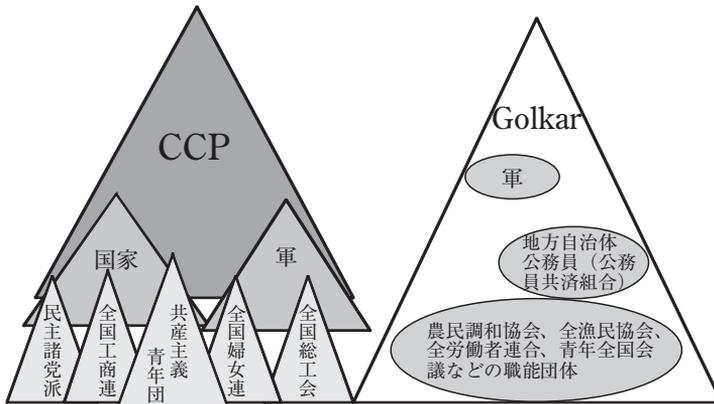
アジア諸国、とくに長い権威主義体制から経済発展、民主化の道をたどった途上国との比較は有用です。開発独裁期の東南アジア諸国の政党体制と中国のそれはとても類似性が強いのです。

【表2】で明らかかなように、主に七〇～八〇年代を中心に東南アジアでは一党優位の権威主義体制のもとで経済成長を実現しました。藤原帰一は、「組織・人員・財政支出において、行政機構のリソースを排他的に利用し、行政機構との区別がなくなった政党」である「政府党」が「政権を掌握した結果、政党間の競合から政治権力の掌握が事実上脱落した政治体制」が生まれたと考え、それを「政府党体制」と概念化しました〔藤原帰一一九九四〕。

【表2】 東南アジアの権威主義体制と執権政党

国名 トップリーダー	時期	執権政党
インドネシア・ スハルト体制	1966-1998 年	ゴルカル (職能集団)
シンガポール・ リー体制	1968 年～	人民行動党 PAP
マレーシア・ マハティール体制	1981-2002 年	統一マレー人国民組織 UMNO
フィリピン・ マルコス体制	1965-1986 年	新社会運動 KBL

【図1】 中共党とゴルカル -- 翼賛体制比較



共産党が長らく一党独裁し、経済開発を第一課題にしている中国はまさしく典型的な「政府党体制」国家だと言えます。東南アジアの一部の「政府党」、とくにインドネシアのゴルカル（職能集団）と中国共産党には強い類似性が見られます。【図1】は、国家機関、軍隊だけでなく、あらゆる社会団体を体制内に包摂した翼賛体制として、中国共産党体制とインドネシアのゴルカル体制を対照したものです。

党は国家のみならず、社会に浸潤し、翼賛体制を構築し、社会総体をコントロールしてきた、というのが三〇年続いたスハルト時代のゴルカル体制であり、それと同じ中国の共産党体制はいまなお、基本的には健在です。中国の「アジア化」は、中国分析に新しい道具や武器を提供するだけでなく、社会科学一般に新鮮な問題提起をしてくれるに違いありません。

### 挑戦その三 制度化の視点

対象の変化が激しすぎる場合、かえって「変わらない部分」に着目した方が本質に迫れるようです。三〇年間の改革開放とその結果を見てみると、政策が変わるわりには、制度がほとんど変わっていないことに気づきます。「変わる政策・変わらない制度」と言えるでしょう。なお、ここでいう「制度」は法的に確定された制度を指し、ゆるいルールは含まれません。先に上げた四つのモデルのうちでは近代化モデルに当てはまるでしょう。

まず変わった制度を見てみましょう。基本法である憲法には、八二年以来大きな変更が二つありました。「国家は基本的人権を保障し、尊重する」と初めて人権条項が入ったこと（二〇〇四年）、「公民の合法的私有財産は不可侵」だとしたこと（同）です。中国の一部の法学者は、この二つの大きな変化ゆえに、〇四年を「立法元年」と呼んでいます。

その他大きな変更は、農民の請負い経営権の承認（三〇年間。農民土地請負い法、〇三年採択）、および「市場におけ

るあらゆる法主体（国有、公有、私有）の平等な法的地位、発展の権利」の保障です（物権法、〇七年三月採択）。物権法は私有財産を保護する画期的な法ですが、翌年、企業国有資産法が採択され（〇八年一〇月）、国有経済の主導的役割と国有資産に対する国家の強い保護を再確認しており、私有の保護は必ずしも安定的とは言えません。

一方、選挙制度にかかわる制度変更は始まったばかりです。五〇年代から都市と農村の代表権格差がとても大きかったのですが（最大で八・二）、二一〇一年に選挙法が、「全国人民代表大会の代表定数は、常務委員会が各省・直轄市・自治区の人口数にもとづき、一代表が代表する人口数が都市・農村で等しいという原則で配分を行う」と改正されました。二年三月には、二〇一三年の第一二期全国人民代表大会の代表選出から一・一の選挙法で選挙を行う政策を決めました。ここに到るまで実に六〇年の歳月がかかったわけです。

以上のように、改革開放の措置、政策、成果が法に確定されたケースはわずかしかなかった。中国の政治・社会にかわる諸制度は一九五〇年代半ばにできたものが多く、五四年憲法と五〇年代半ばの公有制への移行が今までの中国の体制の屋台骨なのです。党・国家（立法・行政・司法機関）・軍隊の三位一体の政治体制は五〇年代半ばに制度化されました。三位一体を担保するのは三者を結ぶ三つのチャネル——国家機関その他の指導部に作られている党グループ、党機関内に設置されている、行政・司法・立法に対応した対口部、党中央組織部が掌握しているトップエリート人事——であり、これらは鼎状をなし、超安定型メカニズムとして、今日まで大きく揺らいではいません。

### 黄宗智の第三領域論から

ところで、パラダイム転換を主張する黄宗智がその後、興味深いテーゼを提示しています。黄の第三領域論は、これまで述べてきた毛里の「三元構造論」を補強するものだと評価できますので、以下に紹介いたします。

黄宗智は、西方のダイコトミー、たとえば国家と社会、計画と市場などの二項対立で中国のこれまで、これからを判定するのは間違っており、中国では、前近代も、近代も、現代も、対立的な二項の間に「第三領域」があつて固有の構造を作り出している、と述べています。「国家と社会の二元対立という仮説は、西方経験を抽象化し理想化したもので、中国の近現代に適用できない」、「国家と社会の間に第三の空間、国家と社会の双方が参与する空間がある」と言うのです〔黄宗智二〇〇三〕。なお、黄の第三領域論にハーバーマスの「公共領域」論の影響が見て取れますが、二項対立から脱却せよという主張は、昨今、「中国模式」論を声高に提唱している潘維（北京大学）などの提起と一脈相通ずるところがあります〔毛里二〇一七〕。

黄は具体的実例として、三つの領域からなる中国の司法体系（① 成文法典・官家法廷の正式司法体系、② 宗族・社区が紛争解決、調停する習慣的な法によつて構成される非正式司法体系、③ 両者の間の第三領域）、及び郷鎮の郷保、村の正長、牌長など、伝統中国から続く県レベル以下の准官僚の制度（セミ・オフィシャル）、を挙げています。このような准官僚がいはじめに国家機構はコントロール範囲を広げ、社会の末端に浸透できる、と黄は指摘しています〔黄宗智二〇〇三〕。

黄はこの種の三元構造は前近代から続いているが、毛沢東時代に第三領域の国家化が極端に進んだ、と述べています。改革開放後に二元構造から三元構造への移行が新たに見られるとする毛里の認識とは些か異なりますが、この議論を敷衍すれば、改革開放によつて、毛沢東時代に消えていこうとした「第三領域」が復活してきた、という議論もでき、毛里説と接合することは可能です。

黄宗智は、毛沢東時代に国家化された第三領域がいま再び復活していると考えているようですが、とくに興味深いのは現代の改革に関する次の三つの指摘です。

① 農村で（土地の）公有制を担うのは、官僚制国家でもなければ、民間でもない、その中間物である。

② 郷鎮企業は国営経済でもなければ、私有経済でもない。しかし、国家のコントロールと市場からの刺激という二重の影響を受けている。

③ 新型私有企業の大部分は、党・国家機構と絡み合った関係にある。国家から独立している、ましてや国家と対立している、などに見なすわけには行かない。

つまり黄宗智は、国家と社会二元対立の欧米型モデルでは、中国のこれまでも、これからも説明することはできない、とするのです。彼が提唱するのは、国家、社会、第三領域の関係を解明するための、創造的な仮説です。私は、この黄宗智の提起に大いに勇気づけられて、三元構造論をはじめとする三つの挑戦を続けていきたい、と考えております。

毛里和子、二〇一二年九月記

\* \* \* \* \*

#### 主要参考文献

- ◆ 平野健一郎他編『インタビュー戦後日本の中国研究』（岩波書店、二〇一一年）
- ◆ フイリップ・ホアン（黄宗智）（唐澤靖彦訳）「中国研究におけるパラダイムの危機―社会経済史におけるパラドクス―」『中国―社会と文化』第9号、一九九四年
- ◆ 黄宗智「中国的公共領域」与「市民社会」―国家与社会間的第三領域― 黄宗智著『経験与理論 中国社会、経済与法律の实践歴史研究』中国人民大学出版社、二〇〇七年
- ◆ 加藤弘之（久保亨との共著）『進化する中国の資本主義』岩波書店、二〇〇九年
- ◆ 中兼和津次『体制移行の政治経済学』名古屋大学出版会、二〇一〇年
- ◆ 藤原婦一「政府党と在野党―東南アジアにおける政府党体制」萩原宜之編『講座現代アジア3 民主化と経済発展』東京大学出版会、一九九四年
- ◆ 呉軍華『中国 静かなる革命』日本経済新聞出版社、二〇

〇八年

◆毛里和子「社会主義の変容 中国とロシア」萩原宜之編『講座現代アジア3 民主化と経済発展』東京大学出版会、一九九四年、45―76頁

◆同「中国の構造変動と体制変容をめぐる」、同「中国はどこへ行く」毛里編『現代中国の構造変動―大国中国へ

の視座』東京大学出版会、二〇〇〇年

◆同「東アジア共同体」を設計する―現代アジア学へのチャレンジ」山本・天児編『東アジア共同体の構築―新たな地域形成』岩波書店、二〇〇七年、1―34頁

◆同『現代中国政治第三版 グローバル・パワーの肖像』名古屋大学出版会、二〇一二年

付録 毛里和子の簡歴

(略歴)

一九五八年 お茶の水女子大学 付属高等学校 卒業

一九六二年 お茶の水女子大学 文教育学部 史学科卒業

一九六五年 東京都立大学大学院人文科学研究科 修了

一九六五年 日本国際問題研究所 研究員、主任研究員(↓一九八七年)

在上海日本国総領事館専門調査員(一九八一―八三年)、静岡県立大学国際関係学部教授(一九八七―九四年)、横浜市立大学国際文化学部教授(一九九四―九九九年)、早稲田大学政治経済学術院教授(一九九九―二〇一〇年)をへて  
現在 早稲田大学名誉教授、荣誉フェロー、華東師範大学顧問教授

(受賞など)

二〇一一年 文化功労者(現代中国研究、現代アジア研究での貢献)

- 二〇一〇年 第21回福岡アジア賞研究学術賞  
二〇一〇年 第1回中国國務院新聞辦公室・上海社会科学院の「国際中国学貢献賞」  
二〇〇七年 第28回石橋湛山賞  
二〇〇七年 第22回大同生命国際文化基金・地域研究賞 など

(主要著作)

- 二〇一二年 『現代中国政治 グローバル・パワーの肖像』名古屋大学出版会  
(韓国語二〇一二年)  
二〇〇六年 『日中関係 戦後から新時代へ』岩波新書  
(韓国語二〇〇七年、中国語二〇一〇年)  
一九九九年 『現代中国政治を読む』山川出版社、世界史リブレット  
一九九八年 『周縁からの中国 民族問題と国家』東京大学出版会  
一九六二年東洋史卒業

【付記】

毛里和子さんは、お茶の水女子大学文教育学部史学科の卒業生で、現在、早稲田大学名誉教授。ご専門は、中国政治と外交、東アジア国際関係。二〇一一年に「文化功労者」に顕彰されました。おめでとうございます。今回は、お祝いの会での講演をもとにお書きいただきました。